新選組読本

しんせんぐみどくほん

司馬遼太郎他

日本ペンクラブ編

●収録作家

司馬遼太郎　中村彰彦　小野圭次郎
子母澤寛　服部之総　大岡昇平
池波正太郎　平尾道雄　永井龍男
佐藤昱　三好徹

光文社文庫

日本ペンクラブ編
新選組読本
著者　司馬遼太郎他

2003年11月20日　初版1刷発行

発行者　八木沢一寿
印刷　慶昌堂印刷
製本　明泉堂製本

発行所　株式会社 光文社
〒112-8011　東京都文京区音羽1-16-6
電話　(03)5395-8149　編集部
8114　販売部
8125　業務部
振替　00160-3-115347

© The Japan P.E.N.Club 2003
落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。
ISBN4-334-73594-0　Printed in Japan

Ⓡ本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

光文社文庫

新選組読本

司馬遼太郎他／日本ペンクラブ編

光　文　社

『新選組読本』目次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

王城の護衛者　司馬遼太郎　7
八木為三郎老人壬生ばなし　子母澤寛　129
新選組異聞　池波正太郎　207
新選組隊士・斎藤一のこと　中村彰彦　261
新撰組　服部之総　271
新撰組　平尾道雄　287
土方歳三遺聞　佐藤昱　323

新選組　伊東甲子太郎　小野圭次郎　343
竜馬殺し　大岡昇平　377
沖田総司　永井龍男　405
八郎、仆（たお）れたり　三好徹　555
選者解説　612

王城の護衛者

司馬遼太郎（しばりょうたろう）

司馬遼太郎（しば　りょうたろう）

一九二三年～一九九六年。大阪市生まれ。大阪外国語学校蒙古語部卒。「ペルシャの幻術師」で講談倶楽部賞、『梟の城』で直木賞を受賞。『竜馬がゆく』『国盗り物語』『坂の上の雲』『空海の風景』『翔ぶが如く』など構想の雄大さ、自在で明晰な視座による作品を多数発表。この他『街道をゆく』『風塵抄』『この国のかたち』などの紀行、エッセイも多数。

会津松平家というのは、ほんのかりそめな恋から出発している。

秀忠の血統である。

この徳川二代将軍は閨に律義なことで知られていた。噺がある。秀忠が家康の隠居所の駿府にきたとき、家康が、さぞ退屈だろう、といって、侍女のなかから「花」という名の美少女をえらび意をふくめて秀忠の陣中見舞にやった。が秀忠は指ひとつ触れずに家康のもとにかえした。

「そういう男だ」

と、家康はあとでいった。この点だけはわしはあの息子に及ばぬ、と家康はその後も思い出しては笑った。

物堅さは、秀忠の性質らしい。

しかしただ一度だけ、侍女に手をつけた。正夫人達子の侍女で、神尾という浪人の娘だ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

った。

すぐ妊った。秀忠はおどろき、すぐ遠ざけて市中にさがらせた。

秀忠は、その正夫人達子を怖れつづけてきた男である。達子、別称はお江、豊臣秀吉の側室だった淀殿の妹である。達子は癇気がつよく、秀忠もそれを怖れすぎた。このためにただ一度の浮気の相手を、市井に投げすてるように捨てた。

女は神田白銀町の親族の家にさがり、そこで男子を生んだ。生むとともに町奉行米津勘兵衛に告げ、米津は、時の老中土井利勝に告げた。利勝が秀忠に告げると、

「覚えがある。ただし奥には内緒ぞ」

といって始末を利勝に命じた。その児七歳で、信州高遠の城主保科正光にあずけられ、正光の子という名目で育った。

秀忠と親子の対面をしたのは出生後十八年目の寛永六年である。

秀忠はその後三年で死んでいる。

秀忠の死後、寛永二十年になってようやく大領を貰い、会津二十三万石を領し、若松城主になった。生後三十二年目に、ようやく二代将軍の落胤らしい待遇をうけたことになる。

この初代会津藩主である正之は謹直な性格の男だった。三代将軍家光の実弟であるにもかかわらず、家光にはいっさい狎れず、よく仕えたので、家光もこの人物を愛し、臨終の

とき正之ひとりを病床によび、
「宗家を頼む」
といって死んだ。
このとき正之の感動が、その制定した家訓になってあらわれている。家訓は十五箇条から成っているが、その第一条に、
「わが子孫たる者は将軍に対し一途に忠勤をはげめ。他の大名の例をもってわが家を考えてはならない。もしわしの子孫で二心をいだくような者があればそれはわしの子孫ではない。家来たちはそのような者に服従してはならない」
という意味のことを書いた。この時代の大名の家訓のなかで、将軍に対する忠義をこれほど烈しく説きこんだ例はない。
正之は、家康の血統のなかではもっともすぐれた頭脳と政治能力をもっていた。
藩制を独特な政治学をもって整え、藩士を教育し、好学と尚武の藩風をつくりあげ、ほとんど芸術的といっていいほどの藩組織を完成して、寛文十二年六十一で死んだ。この正之の遺訓、言行が、幕末までのこの藩の藩是となった。
その八世容敬に子がない。

遠戚にあたる美濃高須の松平家から養子をもらいうけ、嗣子とした。
これが九世松平容保である。

容保は、江戸四谷の高須松平家の上屋敷でうまれた。
この高須松平家というのは尾張徳川家の分家で、三万石でしかない。
当主は摂津守義建と言い、子福者という以外に取り立てて能はなかった。その子はみな容貌すぐれ、才気があったから、徳川一門の諸名家から養子の貰いが多かった。八人の男の子があり、長男と四男は早世した。
次男慶勝は尾張徳川家を継ぎ、三男武成は石見浜田六万一千石の松平家を継ぎ、五男茂栄は一橋大納言家を継ぎ、六男が容保、七男定敬が伊勢桑名十一万石の松平家を継ぎ、八男茂勇が生家を継いでいる。
「銈之允（容保の幼名）君をぜひ会津中将家に」
という使者が会津藩からきたのは弘化三年容保の十二歳のときだった。
「これで、銈の字も売れた」
と、実父の摂津守義建はよろこんだ。義建は子を生むことだけを仕事のようにして生ん

で来、その教育にはみずから師匠になって歌学などを教えるほどに細心だった。
「みなゆくゆくは大名になるのだ」
と、磨(みが)くようにして育てた。そのなかでも鈷之允がもっともすぐれているように義建には思われた。
「この子は、子柄がいい」
と、平素、家臣にもいった。大々名ともいうべき会津松平家に縁組(はなし)がきまったとき、よろこぶよりもむしろ使者に恩を着せ、
「会津家は興隆(こうりゅう)するぞ」
といった。
容保はこのとし六月、江戸城和田倉御門内の会津松平家上屋敷に移った。
「なるほどお子柄がいい」
と、松平家の男女がさわぐほどに、この少年の容姿はうつくしかった。
養父の容敬も満足した。この容敬も美濃高須松平家の出で、容保には伯父にあたる。
対面した最初の日、容敬はこの少年を邸内でもっとも神聖な部屋とされている一室にまねき入れた。
「あれに土津公(はにっこう)が在(いま)す」

と、容敬は部屋の正面を指した。土津公は、初代正之の神号であった。この会津松平家は正之の遺命により、藩主の信教は神道（しんとう）ということになっている。この点でも、他の諸大名とはまるで様子がちがっていた。

歴代藩主の死後の名も戒名ではなく、神号であった。第一世正之は土津霊神、第二世のみは例外で、第三世は徳翁（とくおう）霊神、つぎは土常（つちとわ）霊神、恭定（ゆうしず）霊神、貞昭（すみてる）霊神、欽文（あきさと）霊神というふうになっている。それらの神霊が、この部屋に神式によって祭られていた。

（異様な）

家風だ、という印象を、この少年はまずこの神霊室でもった。死後、世間の常識でいえば仏式で祀（まつ）られるはずなのに、この家のみは異風であった。

「これが会津松平家なのだ」

と、養父の容敬は、司祭者のような厳粛な顔でいった。

「他家とはちがう。死後、仏とはならぬ。神になる」

「神に」

少年は、ほとんどおびえたように目を見ひらいた。容敬は、

「私もだ。むろん、そなたもなる」

といって、硯（すずり）をひきよせ、浄紙一葉に「忠恭（まさお）霊神」と墨書し、

「これが私の神号だ。死ねば、そなたにこの神号をもって祭ってもらわねばならない。さらに」

と、容敬は、忠誠霊神、と書いた。

「これがそなたの神号である」

少年は自分の神としての名がすでに用意されていることを知ったとき、緊張のためにほとんど失神しそうになった。

「そういう家をそなたは継ぐ」

と、容敬は言い、身を傾けて少年の目をのぞきこんだ。少年はこの衝撃に堪えられなくなり、すでに発熱していた。

容敬はさらに筆をとり、「土津霊神」の十五箇条の家訓を書き、

「これを守るためにそなたの生涯がある」

と、少年に手渡した。

ついで容敬は、その「家訓」をまもるために必要な心構えを箇条書きに書いた。

「およそ正直をもって本とせよ」

「身に便利なることはよろしからず。窮屈なるを善しとする」

などというものであった。さらに会津藩の家風、士風を説明した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com